

## イタリアの印象記

富山県農村医学研究所 寺西秀豊

### 1. はじめに

昨年2018年9月にイタリアへ行く機会があった。イタリアのミラノの近く、パルマ (Parma) というところ (図1) で国際空中生物学会議 (ICA-11) が開かれたので、参加することにした。

表的チーズのパルミジャーノ・レッジャーノや生ハムを楽しむことができた。パルマは、イタリア共和国エミリア=ロマーニャ州にある都市で、その周辺地域を含めて人口約19万人の基礎自治体 (コムーネ) を形成している (図3)。



図1 イタリアの地図とパルマの位置

イタリア旅行は私には初めての経験である。成田空港からミラノまで直行便で12時間、無事にミラノについた (図2)。学会の開かれたパルマは食文化の町として有名なところとのことで、代



図2 イタリア、ミラノに着いた筆者



図3 パルマの市役所

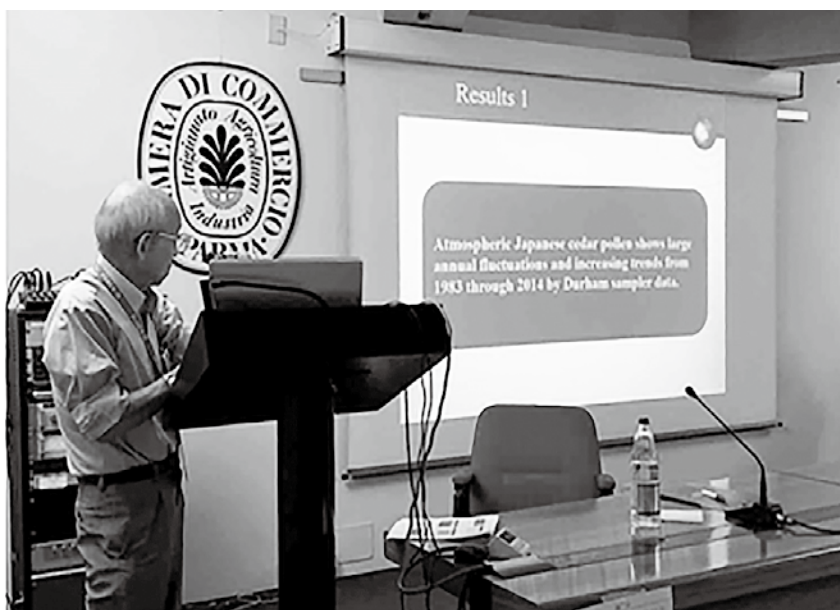


図4 学会における発表風景



ブタクサの絵

## 2. 国際空中生物学会議

ICA-11は国際空中生物学会が4年に一度開催する空中花粉等（Aerobiology）に関する国際会議である。私は協議会のメンバーとして次期学会開催地の決定などに関わることができた。学術会議では富山で発見された無花粉スギの予防医学的意義について発表した（図4）。スギ花粉症は日本独自の花粉症なので、難しい質問は出なかった。イタリアの婦人研究者から、「良い発表だった」と言われ励まされた。現在ヨーロッパではブタクサが繁茂して、問題になっている。ブタクサはアメリカ原産の有名な花粉症惹起植物であるが、イタリアを含むヨーロッパ各地に侵入し繁茂しており（図5）、学会でも大きな問題として取り上げられていた（図6）。EU各国で、ブタクサ花粉症の増加とその被害の実態や対策が研究されていた。抗原性花粉とアレルギー疾患増加は国際的問題となってきたという印象をもった。



図5 パルマ近郊におけるブタクサ繁茂



ブタクサにより地域で60万人が花粉症になり、4千万ユーロの損失となるという

図6 パルマの学会の様相

### 3. イタリアの花粉症惹起植物

イタリア・パルマの花粉カレンダーを（図7）に示した。

重要な花粉症惹起植物としては、ブタクサ (*Ambrosia artemisiifolia*) とヒノキ科 (Cupressaceae) が上げられる。パルマの東、最古の大学で知られるボローニャにも大きなヒノキ科植物イトスギ (Cypress) が多く植えられていた (図8)。その他の花粉としては、カバノキ科 (Betulaceae)、ハシバミ属 (*Corylus*: Hazel)、イチイ科 (Taxaceae)、モクセイ科 (Oleaceae)、イラクサ科 (Urticaceae) などが認められている。モクセイ科にはオリーブ (olive、学名: *Olea europaea*) が含まれており、南ヨーロッパの花粉症の原因花粉として重要である。

### 4. イタリアにおけるスギ花粉症

たまたまイタリアのボローニャ大学附属植物園を見学することができたが、面白い事に東洋のイチヨウの木や日本のスギの木 (*Cryptomeria japonica*) が植えられていることを発見した (図9)。よく見ると、正常の葉のスギ(B)に交じって、特殊な葉の形態を示す品種 (A) が展示してあった。ジュピナイル (juvenile) という、持続的に幼若な葉を示す品種との意味のようで、確かに私が観察した限りでは、雄花も球果も存在しなかった。誰が、何時、何のためにイタリアの地にこうした植物を植えたのかは分からなかったが、少なくとも昔から、イタリアには東洋や日本との交流があったことを示しているのだろう。世界の歴史の壮大なロマンを、大変身近なものとして感じることができ幸せであった。

帰国後、富山大学で文献を検索してみると、北イタリアの一部の地域では、スギ花粉によるアレルギー症状が観察されるという論文が見つかった。今後検討すべき興味深い課題と考えられた。

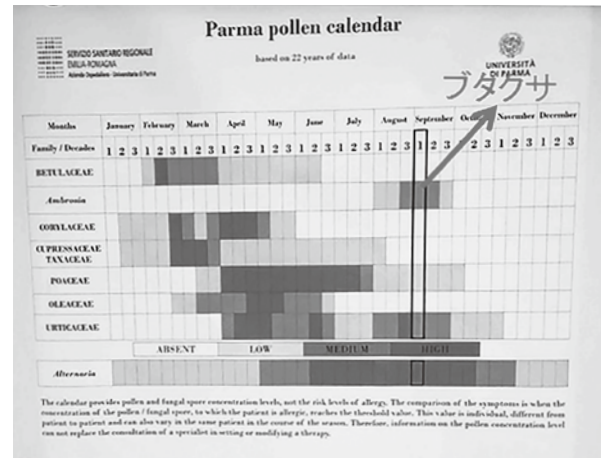
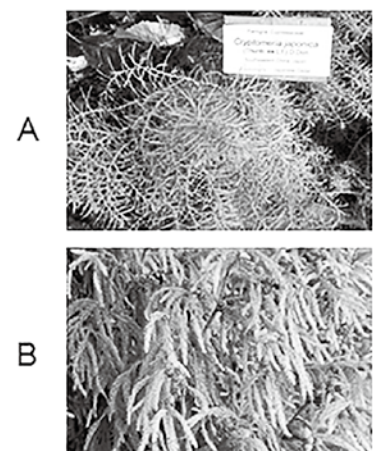


図7 パルマにおける花粉カレンダー



図8 ボローニャ 駅前に見られたヒノキ科イトスギ (Cypress)



A. ジュピナイル・タイプ (juvenile type)  
B. 正常のタイプ (mature type)

図9 ボローニャ大学植物園のスギ

## 5. 北イタリアの気候と文化

北イタリアの気候は、南イタリアの温暖な地中海性気候とは異なり、比較的大陸性の冷涼な気象で、冬には雪が積もることもあるという。山間地もあり歴史的に長く都市国家が分立していたことから伝統的に地方分権を求める政治意識が強く、中央集権的な南イタリアとは異なっている。

イタリアは歴史遺産の宝庫とも言うべき文化国家である。パルマ国立美術館にはレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画「ほつれ髪の女性」が飾ってあった(図10)。説明の多くはイタリア語のため十分理解できない部分もあったが、イタリアの文化と歴史を十分身近に感じる事ができた。

医療福祉介護の分野でもイタリア独自の発展を遂げているようであった。医学医療、保健、看護等の分野で、もっと交流があっても良いのではないかと思った。



図10 レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画  
「ほつれ髪の女性」

## 6. まとめ

今回、イタリアを訪問し、北イタリアにおける花粉症について見聞する機会があった。

北イタリアにおけるブタクサ繁茂の実態やスギの存在が確認でき、大変有意義であった。

### 謝辞

最期に、ご助言いただいた金沢医科大学中川秀昭先生、金沢大学城戸照彦先生、YKK イタリア社の山口仁史氏および富山県医師会花粉症対策委員会の方々に感謝申し上げます。

### 文献

Crosta, G et al. : Minor pollinosis from *Cryptomeria japonica* in Varese, northern Italy. Aerobiological monitoring and main clinical features. *Aerobiologia* 12, 133-137, 1996.

寺西 秀豊, 斎藤 真己: 無花粉スギの発見と花粉源対策. *日本花粉学会会誌* 62 : 87-92, 2017.

寺西秀豊: けんこう教室 春はアイツとともに 花粉症. *いつでも元気*, 保健医療研究所, 317, 16-19, 2018.